

三好達治との五〇年

出会いのころ

—佐谷さんが三好達治についての文章(「はるかなるものみな青し」)を書くことになったいきさつなどからお聞かせください。

「文学空間」の編集委員に山崎勉という友人がいてね、彼とわたしは小学校、中学校、高校と同学でした。彼は東京大学の英文科にいまして、その後、専修大学で現代英米文学者としていろんな本を翻訳していますけれども、現代美術もたいへん好きで、わたしの画廊にもずいぶん遊びにきたりしていたんです。その彼の先生が作家の小島信夫さんで、小島さんは「文学空間」の顧問をしておられた。一九八七年のある日、彼が小島さんを連れてきて、その夜にわたしはとある小料理屋でお酒を酌みかわしながら三好達治さんや瀧口修造さんの話をしました。小島さんはそれをとてもおもしろがられて、三好達治のことは絶対に書くべきだと、「文学空間」への寄稿を強く勧められました。わたしは三好達治さんのことについてはいつかは書いておかなければならないと思っておりまして、では書いてみようということになったんです。四百字詰五〇枚という分量の文章を書くのは慣れていませんので、だらだらした作文にならないように、気をつけて書きました。最初に三好さんに会いに行ったところから、祖母のことを中心に書き、父親のことにも触れ、そしてじっさいに達治さんにお会いしてお話したときのことを書くというかたちにして、最後に達治さんのお墓参りをしたときのことを書いてしめくくりました。

—佐谷さんと三好達治との感動的な出会いについてこの文章にかかれています、その後、三好さんとどういっておつきあいをされたんですか。

三好達治さんに最初に会ったのは、終戦の二年後で一九四七年八月三〇日、福井県三国町の森田別荘を訪ねた時でした。わたしは京都府の舞鶴生まれで、中学まで地元で過ごし、高校は金沢の旧制第四高等学校、大学は京都大学です。そんなわけで舞鶴の実家に帰省したり、また金沢にもどったりする途中に、ちよくちよく三国の達治さんのところに寄り寄りしてました。わたしが達治さんに初めてお会いしてました当時は、戦争後の混乱期でしたから学生の身分で本を買うということはとても無理で、本屋であたらしい本を見てはいいなあと思っても、なんども手にとってみたりするだけでした。それが達治さんのところにいきますと「これあげるよ」といって「人間」や「新潮」といった文芸誌をくださるんです。なかでも「創元」第一集は編集者が小林秀雄、青山二郎、石原龍一、絵画の部は梅原龍三郎の特集で、みごとな原色刷でした。本文には小林秀雄「モオツアルト」、中原中

也「詩四篇」、吉野秀雄「短歌百余章」、島木健作「土地」(小説)、青山二郎「梅原龍三郎」、と見事な本に近いもので、とても戦争が終わって一年四カ月後の出版とは信じがたい豪華な雑誌でした。わたしには高嶺の花で、だまって眺めているほかなかったのです。よほど欲しそうな顔をしていたんでしょうか。達治さんは「それもっていいよ」とおっしゃったのです。わたしは狂喜しました。その「創元」が、ここに 있습니다。五三年間わたしと旅をした雑誌です。奥付には大阪創元社刊、定価百円とあります。

印象にのこるのは、厳格な教育者としての気風が強かったということです。たとえば辞書の話をしてみると、ドイツ語の辞書なら片山正雄、英語では市川三喜、それだけでなく英英辞典、独独辞典、仏仏辞典も持っておかなければだめだとか、とにかくいい辞書を持って、中途半端な辞書は駄目だ、とおっしゃってました。

日常のことばについても、わたしがたとえば「たばらがに」と言い間違えたりすると、すぐに「それは君、違うよ、鱈の場所にいるからたらばなんだ」とおっしゃる。また百貨店の「白木屋」のことを「しらき屋」というと、「違うよ、しろき屋だ」、とすぐさま訂正されました。ときには「浅虫温泉という言葉はいいなあ」、と独り言されたこともありました。言葉についてはいつも厳しかったですね。わたしの中学校時分は戦争のまっただなかでしたから、勉強してませんので語学はずかしくらいできませんでした。高等学校に入ってやっと英語をならったという感じでした。そのときエドガー・アラン・ポーを読みたいへん好きになったりしましたが、英語がむづかしい、と達治さんに言ったら、「ポーをむづかしいなんて言ったら駄目だぜ、そんなものはおれは中学のときに読んだ」なんてはっぱを掛けられたりもしました。それから「君、フランス語は勉強しているか」と聞かれまして、「いえ取ってません」と答えると、「フランス語もいまのうちにやっておいたほうがいいぜ」なんておっしゃって、内藤濯のフランス語の教科書をだしてきて「これで勉強したまえ」と、その本をいただいた記憶があります。達治さんには若い連中にきちっとしたものを教え、習得させたいという願望が強かったと思います。小説のことで、と、「まず梶井基次郎を読みたまえ」と言われました。それから「君は詩人では誰の詩が好きか」とおっしゃるので、わたしは中学の国語の教科書で読んだ佐藤春夫の紀州のなんとかという詩をその当時、丸暗記で覚えていたので、それを声に出してよんだんです。そうすると「ああそう、君は佐藤春夫が好きなのか」と、にやっと笑われましてね、わたしはそのとき三好さんが佐藤春夫さんとあまり仲が良くなかったなんて知りませんでしたから(笑)。これはごく最近の話ですが、達治さんの娘さんにお会いしたとき、佐藤春夫編『詩文四季』(昭和三九年、雪華社)をみせていただきました。何と三好達治の詩一〇篇が谷崎潤一郎の文章の次にあるんですね。三番目は大佛次郎、以下井上靖、小林秀雄と計一三名の作家が並んでいるのです。松子さんは、その本をわたしにみせて佐藤春夫と三好達治

はいろいろと問題はありませんでしたが、心の底では春夫は達治を評価していたと思いますと話されました。あのころは達治さんの詩も自分で誦じているものは、達治さんの前でよんだりしましたね。それから、四高の寮歌「南下軍」、「北の都」も歌ったのを憶えています。特に「北の都」については若者らしいいい寮歌だとほめられました。いま振りかえってみるとあんなことよくやったものだな、と思いますけれど。その頃からわたしは絵が好きでしたから、達治さんから絵のことについても話を聞きました。達治さんは鳥海青児さんを評価しておられましたね。これも三好さんの教師的な面を示していると思いますが、「絵というものはまずたくさんいいものを見なければ駄目だ」とか、「彫刻は真正面からだけみるものではなくして、ぐるっと一回りしてなるほどと思わせるものでなくてはいけない」とか、ごく基礎的だけでも重要なことをわたしは教えていただいたと思っています。

—それは誰に対してもそうだったのでしょうか。

わたしは知りませんでしたが、三国の達治さんのところには若い人たちがあつまるサークルがあったみたいですね。それが最終的には石原八束さんたちの「文章会」というかたちになっていったんだろうと思います。わたしなんかはある意味では、特別に個人教授を受けたということになるのかもしれませんが。

幼時体験と正義感

—三好さんの教育者的側面というのは、大岡信さんがいっておられる「道徳性」とか「正義感の強さ」に繋がっているようにも思われますが、そうしたもってうまれた正義感は幼児体験から助長されたということはあるのでしょうか。

わたしの三好達治さんについての意識のめざめは、わたしの祖母ハツなんです。達治さんは一九〇六年にわたしの家に養子に來られて、それからほぼ一年間舞鶴の佐谷家で生活しています。その達治さんを、うちの祖母がどういうわけか溺愛したらしいのです。と同時に溺愛の過程のなかで、まだ六歳の達治さんの性格というか資質というものを、うちの祖母のハツがしっかり見極めていたのではないかという気がしますね。はやくに母を亡くしたわたしも同じようにその祖母に溺愛されましたけれども。

—つまり三好家の家系と、養子にいった佐谷家でお祖母さんに教えられた厳しさということになるのでしょうか。

厳しさではなくてわたしはむしろ溺愛だと思います。しかし達治さんにとってははじめての大変化ですから、その意味では厳しかったことと思います。達治さんがわたしの家に養子にきた理由というのは、祖父と祖母の間に子供がなかったために、養子を貰う必要があったのです。祖父の彦蔵は達治さんのお父さんの政吉さんと仲良しでしたから、その話をしたんだと思います。そこで二人の合意ができ、達治さんが佐谷家にみえたというわけです。達治さんは三好家の長男ですから、これほど無茶な話はありません。達治さんは長男であったため結局籍を入れることができず、病気もかさなって、一年で兵庫県三田町の祖父母のもとに引きとられることになるのです。当時のことを達治さんは「暮春記」で記しておられます。「……ふとしたことから、貰ひ子に貰はれていつたことがある。この出来事は、……今もはつきり私の記憶に残つてゐる。……」その達治さんをハツは溺愛したのです。

—佐谷さんのお祖母さんはどういうひとだったのですか。

商売一筋の人間でしたね。家の商売を支えたのは祖父というよりも、祖母です。祖父はわりと優雅に寺のお坊さんなんかとつきあったり、書画骨董が好きで、仕事で京都、大阪に行くときは京都博物館にいった絵など美術品を何時間も見ているというひとでしたから、それに付き合った祖母はたいへん往生したようです。佐谷家具店はわたしの弟の息子が引き継ぎ四代目になりますが、その基礎をつくったのがハツでした。地元の商家の大店の夫人七人が毎月佐谷家に集まり、話しをする七福会のリーダーであり、晩年には海軍さんのおかげで佐谷家具店の今日があるとして、海軍病院に五〇〇〇円寄付したというのですから、並の女性ではありません。このハツが達治さんを溺愛して、ことあるごとに「達治、達治」ですからね。わたしはおやじのことがだんだん気の毒な感じがした記憶があります。三好さんにはじめて会ったときに、半年前に祖母が亡くなったことを告げると、頭をガクンと落としてしばらく眼を閉じて動こうとされなかったと書きましたが、やはり達治さんにとってもわたしの祖母の存在が特別なものであったという気持ちがしています。また、そういうことはひとには言わないかたですからね。石原八束さんがわたしの家にみえて、達治さんのことについてお話したときに、いろんな話がでましたが、そのなかでもとくに覚えているのは、達治さんが士官学校を中退したときに憲兵が舞鶴の佐谷家まで来たことがあったということですね。わたしはこのことを直接、父から聞きました。石原さんがそれはあなたのお祖父さんが三好さんの保証人だったからです、と断言されたのにはおどろきました。なるほどそういうものかと思ったものです。士官学校を中退されたときのことも、達治さんは誰にもなにも話さなかったようです。石原さんも三好さんの伝記をつくり

ながらわからないのは、やはり士官学校時代のことだとおっしゃっておられました。せいぜい憶測されるのは『艸千里』のなかの「艸千里浜」の中頃三行の部分です。そこで「友」と呼ばれているのは陸軍幼年学校、士官学校の同級生、なかでも二・二六事件のリーダー西田税とその友人たちであることを、わたしは詩人の高橋睦郎さんの著書から教わりました。達治さんとしては事件が事件だけに深く胸に納めて話されることはなかったのだと思います。それとレベルは違いますけれど、舞鶴のわたしの家に一時、養子に来ていたこともひとには話されなかったのではないかと思います。こんなエピソードもありました。達治さんが士官候補生として北朝鮮の会寧に赴任されたときのことですが、猫の子を拾って育てたところ、何と虎であったという話があります。わたしが本当ですか、と達治さんに尋ねたところ、ニヤリと笑って、「それは井伏鱒二くんのところから出たつくり話らしいよ」、とすこぶる楽しそうだったのをよく憶えています。

「雪」の解釈をめぐって

—三好さんにはひとに決して語ろうとしない体験があることがわかりましたが、そこで出てくるのが「太郎を眠らせ、……」の詩ではないでしょうか。

ええ、達治さんは六歳のときにひと冬、雪深い舞鶴のわたしの家ですごされていますので、その「雪」は太郎、次郎という名前でも表現されているような点からみても、一般には蕪村の「夜色楼台図」(京都の市街雪景)だという意見もありますが、わたしはやはり舞鶴の雪じゃないのか、という気がします。わたしの祖母がどんなに可愛がったとしても、子供の達治さんの想いがいくのはほんとうの家族のいる遠く離れた大阪の家でしょうから。

—どうして、この詩がこんなに愛誦されてしまったのでしょうか。幼時体験を遥かに超えて、普遍的な詩情を獲得しているからでしょうか。

「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。/次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。」この詩は句読点を含め一行一九字で、たった二行でできています。さらに、太郎と次郎以外はすべて同じことばが並んでいます。この詩で表現されるイメージとは、まず太郎と次郎のふたりの少年です。そして雪という自然があって、さらに少年を内外から守っている家の屋根という三つの要素で成り立っています。そしてこの風景で動きのあるものをみると、少年の眠り、ふりつむ雪のふたつだけです。眠らせ、とあるのは眠りなさいというこの少年をみつめている作者の心でしょう。そして外では雪がたえまなく、シンシンと降りつもり、すべてのものを包み込んでいきます。わたしはそれをみている作者がいるように

思います。この詩は、単純な言葉の繰り返し、そのリズムによって、わたしの心の底にある少年期の想いをじわじわとふくらませて、次第にもっと大きなものへと向かわせてゆく力を持っています。いつしかこの詩を読むわたしは自分自身をこの詩に投影し、詩の世界と一体となり、自分にはまだわからないが、もっと純粋なもの、高いものに出会えるような気持ちになってくるのを感じます。この詩には具体性を越えた抽象性と普遍性があります。単純で純粋な言葉ほど想いは大きく拡がるのでしょうか。この詩がいつまでも愛される理由はそこにあるのではないかと思います。太郎と次郎は同じ屋根の下に眠っているのか？それとも別々にか？

わたしは、ふたりははなればなれの場所で眠っていると思います。太郎は舞鶴で、次郎は大阪でしょう。この詩がつけられた時期は昭和二年(初出「青空」)で、その一年後には舞鶴のことが記されている「太郎」という詩(初出「信天翁」)が生まれています。そうしたことから考えても太郎は、あるいは次郎も同じく作者の分身であると推察してよいと思います。このようにみえてくると「雪」は蕪村の京都の雪ではなくて、舞鶴の雪であるとわたしは思います。その理由は、少年の達治が過ごした舞鶴の雪の方に強いリアリティがあるからです。

—三好達治の詩の言葉の音楽性についてはどう考えられますか。

達治さんの詩の音楽性については、声を出して読んでみるとよくわかります。この「雪」でもそうです。言葉は意味を伝えるものですが、その意味する言葉をどうして選ぶかは作者の感性でしょう。すぐれた感覚によって選択された言葉が響きやリズムを生みだして、この詩を豊かなものにしていていると思います。われわれの感覚はそれに反応して感動するのでしょうか。三好達治の詩を作曲される方、それを歌う方が多いのも、達治さんの詩の音楽性が優れているからではないでしょうか。音楽については、わたしは達治さんからちょっとしかられたことがあります。ちょうどわたしが三国の達治さんのところへはじめて行って二晩泊まったときに、九月になるとこのあたりは天気不安定だから、八月のうちにやっちゃえということで月見をしました。そのとき天田光平というハーブの名手が来られまして、昔の装束をして黒い沙の着物に黒い帽子をかぶって、琴をひかれました。ぼくはよくわからないと達治さんにいったんです。すると達治さんは、「きみね、西洋音楽ばかりにかたよって、日本のこんなすばらしいものがわからないようじゃ、音楽だなんだっていても笑われるぜ」とおっしゃいましたね。あのころの旧制高校の教養というのは、ヨーロッパが中心で、よほど特殊なひとでないとは東洋のものに関心がありませんでしたし、アメリカのものなんかは馬鹿にしていましたから。いやあ、こっちは勉強が足らんなど思い

ましたけどね。

—三好さんは小説やエッセイも書いてらしたわけですが、**「現代詩読本」**のなかで中村稔さん、大岡信さん、谷川俊太郎さんが共通して、三好さんは**「人事」**に立ち入らない、どんなことでも**「風景」**として描く、とっています。これは幼児体験の話にもつながりますが、三好さんは資質ということとはほかに、人間関係をあからさまに言わないために風景化して表現したというところがあったのでしょうか。

そうなる**「艸千里浜」**なんかも理解できますね。それから**「太郎の屋根に雪ふりつむ」**も見えてきますね。こんなことを三好さんと話したことを覚えています。**「結局この国はなにが根底にあるのでしょうか」**と聞いたことがあります、達治さんは**「自然だ」**、と答えられました。この国の宗教は八百万の神で、この国の成り立ちは**「自然」**だと、そんなことをいま思い出しますね。わたしはあのころ坊やみたいなものでしたけれども。

「戦争詩」と「天皇批判」

—三好さんを論ずる場合、避けて通れないのが、戦中の**「戦争詩」**と戦後の**「天皇批判」**ですが、その前後にはお会いなされましたか。

その前はないんですね。戦後すぐ達治さんは、戦争詩を書いたということでずいぶん責められました。三好さんが戦争詩を書かれていた当時、わたしは中学の四年か五年でしたから当然そういうのも読まなくちゃいけない年ごろだったのですけれど、読んでなかった(笑)。戦後すぐ**「新潮」**に**「なつかしい日本」**を書いた時は、ちょうどそのあとぐらいにお会いしたので読みましたけれども、あれはいまから振り返ってみても、きちっとしたことをおっしゃったという気持ちが強くしています。あれは三好達治さんの潔癖さのあらわれだと思います。そこで三好さんは**「天皇は退位なさるがよろしい」**と書いていますが、この言葉は短絡的などられかたをされてしまって、達治は戦時中は戦争詩を書いたのに、戦争が終わった途端に天皇退位論を説くとは何ごとだという意見がほとんどでした。そのなかで桑原武夫さんは、ほんとうに達治を批判できるのは**「プリンス・オブ・ウェールズ」**というイギリスの戦艦を撃沈したときに悲しんだひとだけで、そうでなかったひとは三好達治の戦争責任を云々する資格はない、というふうに書いておられたのが印象的でした。達治さんがあるとき、ふっと**「僕は社会科学的な勉強をしなかったからなあ」**ともらされたことをわたしは今でも忘れることができません。桑原さんと三好さんの友情についてはわたしは後で知りましたが、達治さんが離婚なさって萩原朔太郎の妹さんのアイさんと一緒にな

ときの保証人が桑原さんでした。これも三好さんの潔癖さのあらわれのように思えてなりません。アイさんというひとはいろいろあったかたとききます。だからこそ三好さんはちゃんと桑原武夫さんという親友を証人に立てて、子供はふたりいましたけれど、正式離婚して、それからアイさんと一緒になられた。これは潔癖以外のなにものでもないとおわたしは思いますね。達治さんと桑原さんとのあいだには三高時代から晩年、最後に至るまでたくさんの手紙のやりとりがあったということはすばらしいことだと思います。三好さんにはいろいろすぐれた友だちがおられました、桑原さんは特別だったんだと『桑原武夫への手紙』(筑摩書房)を読んで思いました。

ここで桑原武夫さんのことについてすこし話して置きたいのです。「はるかなるものみな青し」のなかで桑原さんが登場されるので、私は「文学空間」をお送りしました。すると桑原さんからハガキの礼状が届きました。取り出してみますと、一九八七年七月二三日の日付が入っております。「……私としては往時を思い出し懐しい一刻をもちましたが、三好達治研究の貴重な資料の一つとなることと思います。……」とあり、嬉しかったのですが、末尾に、貴文の伊藤静雄は伊東のあやまりです。とあって恐縮いたしました。その三カ月後、急逝されたことを新聞で知ることになりました。お送りしておいてよかった。

達治さんは「桑原武夫君」というエッセーを「新潮」に書いておられます。年来の親友である桑原さんのしごとと交友について記しておられますが、しめくりの言葉が私は好きです。「……提燈をもったわけではない。提燈をもたなかったわけでもない。ただし、当三好家には提燈のそなえは少い」というものです。

アイさんとの結婚は一年ももたなかったわけです。中村稔さんはあれは達治さんの妄想が起こしたことと言っておられました。お互いに性格が見えてきて、これは一緒に生活できないということになったわけでしょうから。しかし、少なくとも遊び心とかそういうのはなかったということですね。ですから妄想という言い方はなるほどと思いますが、ちょっとむつかしいところがあると思います。風景のなかにおさまらないと、潔癖さが顔をだすのかもしれないね。

ところで、達治さんとわたしの父恒夫についてお話ししたいことがあります。父は達治さんより一つ年上ですが、この佐谷家の養子の先輩と後輩は仲がよかったのです。三高時代の達治さんは舞鶴にときどき顔をみせ、二人で舞鶴湾で魚釣りをして遊んだようです。達治さんは魚釣りはほどほどにして仰向けになって空をみとっちゃった、とは父の話です。商売で京都に行ったとき達治さんの下宿を訪ねたこと、一高対三高の野球を一緒にみたこと、達治さんは泣き上戸だったことなども話してくれました。それにしても、三高時代に舞鶴に遊びに行った達治さんのその動機は何だったのでしょうか。わたしは六歳の、達治さんを溺愛した祖母ハツのせいではないかと推測いたします。

わたしが達治さんと会って、一年後、父と二人で達治さんを訪ね、「若えびす」で一夕
歓談の機会を得、一泊しました。父はどこで調達したのか、ウィスキーを一本お土産に持
参しました。そのときのことで、達治さんは父に、わたしは離婚しましてね、と話され
たのを記憶しております。その後わたしは金沢に戻りましたが、父は達治さんに誘われ、
近くの温泉で二、三泊豪遊(?)したとのこと。父はこの義理堅い先輩を尊敬していま
した。

世田谷時代から晩年にかけて

—アイさんと別れられてから世田谷時代が始まるわけですね。

その前に達治さんにお会いしたとき、京都のさるお寺の境内の屋敷を借りるような話が
あったように記憶しています。しかし昭和二三年の暮れか秋かに福井で大地震があったの
で、結局東京世田谷区の代田に行かれるわけです。小島千加子さんのお話によると宇野千
代さんが岩沢さん宅をお世話されたようです。代田の三好さんのお宅は玄関を開けると本
があふれるくらいいっぱい、はいったら八畳か、十畳ぐらいのところに寝起きしておら
れて、万年床みたいな感じだったですよ。畳に座って仕事をしておられましたから、椅子
に机というわけではありませんでした。こんなこともありましたね。たまたまわたしがいる
ときに、とつぜん仙台から学生が達治さんを慕ってあらわれたんです。そしたら、「約束
してないし、いまはおれは忙しいから帰ってくれ」と、ぴしゃりと言われたので、凄いな
と思いましたね。せっかく仙台から会いに来られたんだから少しぐらいお話しをして、そ
れから帰ってもらえばいいじゃないですかといいますと、「きみね、そんな考えでは大事
な仕事はできないよ」と今度はわたしのほうがピシャツと言われて、こちらも震えあがっ
て早々に退散した覚えがあります。わたしもずいぶん仕事の邪魔をしてるな、と思いまし
てね。そういうはっきりしたところがありました。編集者にとってはこわい存在だったで
しょうね。

—晩年の三好さんについてお話しくさいますか。

三好さんが亡くなる半年前に最後にお会いしたときに、筑摩叢書第一号の『萩原朔太郎』
と『草上記』をいただきました。そのとき忘れられないのは、西洋美術館がちょうどオー
プンするところで、達治さんのところにシャガールの展覧会の招待状がきてたんです。「君
は絵が好きだからこれあげるよ、ぼくはいけないから、いってらっしゃい」といってそれ
をわたしにくださいました。そのあとわたしは関西に出張して、鮎ずしを手に入れたもの

ですからシャガールのお礼に灘のお酒を添えて達治さんのところにいきましたが、留守で会うことはできませんでした。そのころの印象は、こわいのはこわかったですが、わたしもある程度自分でも仕事をしているという意識がありましたから、会って話すときも昔のようではありませんでした。身体の調子が悪いとか、そういう身辺的なことはいわないひとでした。だから息子さんのことや娘さんのこともわたしはあまり聞きませんでした。達治さんが亡くなったのは一九六四年四月五日です。わたしは翌朝の朝刊で知りました。その日は日曜日であったと思います。わたしは自分の部屋で独りになり、なにを考えるのでもなく、夢うつつの放心状態で半日過ごしたのを憶えています。いったいあの虚脱感はどこからきたのか、わかりません。それが私流の達治さんへの喪の服し方だったのだと思います。

一九七三年六月、わたしは二〇年勤めた銀行を辞め、南画廊に勤めることになりました。その年の八月、はじめて高槻市上牧の本澄寺を訪ねました。そこには達治さんのお墓と三好達治記念館があることを知っていたからです。そこではじめて達治さんの弟さんでそのお寺の住職である龍紳さんと息子さんの龍孝さんにお会いし、あいさつをしました。以来お付き合いが続いております。一九九六年三月三十一日、三好さんの三三回忌を本澄寺でやるときに、わたしにも来てほしいと言われました。智恵子夫人がそうおっしゃったんだと思いますけれども。三好家の親族ばかりなんですが、わたしだけ親族ではない、不思議な感じでした。そこでわたしはあいさつをし、祖父、祖母、父のことを話しました。血の繋がりは最初からないんですが、達治さんが一年ばかり家にいたということが、ずっと後々までわたしの人生におおきな影響をもったということは不思議でしかたがないですね。因縁といいますか、こんなことはそうざらにあることではないですから、やはり祖母のちからなんでしょうかね、祖母があんなに三好達治のことをわあわあ言わなければ、こんなことにはならなかったような気がします。

—佐谷さんの今後の三好達治に関するお仕事の詳細な計画を最後にお話してください。

再来年の春に世田谷文学館で記念展をやるということに内定しておりまして、ただいま準備を進めている最中です。本来であれば、従来の経緯からみても石原八束さんが最適任者であると思いますが、二年前に亡くなられてしまいました。わたしは現代美術の仕事をしている人間ですから、専門外、お門違いで、ほんとうは出る幕ではないと思っています。しかし、わたしには三好達治にたいする強い思いがありますし、生誕百年を迎えて何か記念展をやるべきだ、あとで悔いが残るのはまずいという思いもあったんです。そこでわたしは大岡信さんと中村稔さんに相談しました。お二人とも即座にやるべきだとおっしゃら

れ、世田谷文学館での展覧会がお二人の協力により立ち上がることになりました。わたしはお子さんの達夫さん、松子さんとも話し合い、達夫さんと一緒に責任者の方に会いました。検討の結果、準備にまる一年かけ、二〇〇二年春の開催の予定です。ぜひともいいかたちにしたいと思っています。

(「現代詩手帖」二〇〇〇・一〇、聞き手・編集部)